

JISS *Bulletin*

一般社団法人スウェーデン社会研究所 所報 第 385 号



Photo: NATO

【スウェーデンの点描】スウェーデンの NATO 加盟問題

スウェーデンは冷戦終了後の 1994 年に NATO (北大西洋条約機構) と「平和のためのパートナーシップ」を締結、翌年には EU (欧州連合) に加盟し、その後も NATO 陣営との協力関係を実質的に強化してきました。しかし NATO への加盟については、中立の立場を完全に放棄することに消極的な世論に加え、ロシアの軍事的な牽制もあつ

て、長らく具体的な動きに至りませんでした。

その流れが大きく変わったのが、2022 年 2 月のロシアによるウクライナ侵攻でした。スウェーデン政府は、同国の安全保障の状況が根本的に変わったとの認識を示し、世論もこれを後押しする形で同年 5 月にフィンランドとともに NATO 加盟の申請を行い

ました。

そしてフィンランドは 2023 年 4 月に加盟が認められましたが、同時にスウェーデンが加盟することは許されませんでした。NATO 加盟においては、全ての現加盟国の承認が必要となりますが、トルコとハンガリーが反対したためです。両国とも NATO 加盟国でありながら、現政権はしばしば親ロシア的な態度を取ることで知られており、さらにトルコとスウェーデンの間には、ス

ウェーデンに亡命したトルコ系クルド人の処遇を巡る対立がありました。

しかし NATO にとって、スウェーデンの軍事技術と、バルト海・北極海の制海権はとても魅力的です。そこでアメリカやカナダを中心としてトルコへの積極的な働きかけが行われ、2024 年 1 月によくトルコの承認が得られました。その結果、最後まで反対していたハンガリーも 2 月に承認し、ここに NATO への加盟が決定しました。

【2023 年 4 月 20 日研究講座】

『スウェーデンのフェアと幸福』 福島淑彦 早稲田大学教授

今回は早稲田大学教授で、2022 年に『スウェーデンのフェアと幸福』を上梓された福島淑彦さんにご講演いただきました。



福島さんは 1994 年から 2003 年にかけてスウェーデンに暮らし、2017 年から 2019 年にかけて研究のため再び滞在されたということで、スウェーデンの事情に精通していらっしゃいます。ご専門は労働経済学や公共政策ですが、今回はもう少しソフトな形で、スウェーデン社会の仕組みについてお話いただきました。

日本では、同質的な小国、自殺率が高い、離婚率が高いといった、断片的に紹介されがちなスウェーデンへの理解をただし、またそれ

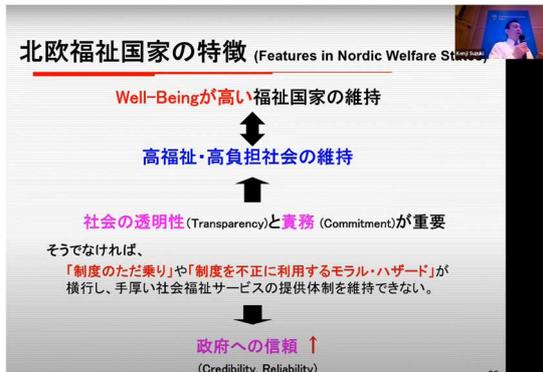
をもとに日本の将来を真剣に考えるきっかけを作りたいという思いで、今回の著書を出されたとのこと。

福島さんによれば、北欧福祉国家が手厚い社会福祉を提供しているのは、それ自体が目的なのではなく、国民一人ひとりのウェルビーイングを最大化させる、より具体的には完全雇用という目的を達成するためです。



そして、これを実現する際に鍵となるのが、社会の透明性 (transparency) と責務 (commitment) であると説きます。なぜなら、高福祉・高負担を維持するには「制度のただ乗り」や「制度を不正に利用するモラル・ハザード」の抑止が必要となるからです。そして、これを

支えているのが、国民の政府への信頼ということになります。



このような仕組みのもとで、スウェーデン

は、「子供は社会が育てる国」「社会的弱者は社会で面倒をみる国」「リターン・マッチが可能である国」「不測の事態に対する備えを怠らない国」であると国民が信ずることができ、それゆえに安心と安全を実感できる仕組みが確立しています。

講演の最後に、こうした仕組みを日本が採り入れるためには、まず国民が政府をしっかり監視し、それに基づいて投票するという形を築いて、そこから政府への信頼感を育むことが寛容であるとのメッセージをいただきました。

【2023年5月30日研究講座】

『スウェーデン人から見た日本の魅力や弱点～二人の違った世代の視点から』 レーナ・リンダル (Lena Lindahl)、ソフィア・マルム (Sofia Malm)

今回は、日本に長く住んだ経験のあるレーナ・リンダル (Lena Lindahl) さん、ソフィア・マルム (Sofia Malm) さんというお2人のスウェーデン人をお招きし、カジュアルな対話形式でお話をうかがいました。



ソフィアさんは、2009年に友達からたまたま日本語の美しさに惹かれ、そこから日本について興味を持つようになり、高校卒業後の2010年に来日しました。レーナさんは、シンプルなデザインの美しさや、それまでふれてきた文化とは全く異なるものというところから日本に興味を持ち、1982年に来日しました。



特にソフィアさんは「くずし字」に惹かれ、勉強していらっしやるとのこと。そこから書き順やスウェーデン人から見た漢字の組み合わせの面白さや、ルーン文字(スウェーデンの古代文字)との対比、敬語による相手との関係性の測り方の話などで盛り上がりました。

また、スウェーデンでは住所や電話番号などの個人情報がインターネットで公開されていることが話題に上りました。日本人からするとあり得ないレベルの情報公開が、スウェーデンでは「便利なもの」として特段問題とされていません。逆にスウェーデン人から見ると、日本では犯罪者の名前や顔写真を公表することに躊躇

がなく、そこに違和感を覚えるようです。



レーナさんからは、日本人の自然との付き合い方にスウェーデンとの違いを感じるとのこと。スウェーデンでは自然を自然のまま愛でるのが基本ですが、日本ではたとえば生け花のように、いったん取り込んで形にするというところに面白さを感じるとのことです。

日本人の細かい手続きへのこだわりも、スウェーデン人にとっては興味深いようです。たとえばホッチキスの止め方まで指定するというのは、「内容が良ければいいじゃないか」と考え

る傾向のあるスウェーデン人にとっては、なかなか理解し難いというお話がありました。



日本人とスウェーデン人の政治への向き合い方についても、様々なご意見をいただきました。その中で印象に残ったのは、レーナさんが長崎の旅行中に見つけた、投票箱が投票を呼びかけるポスターでした。日本では見かけても何気なく通り過ぎてしまうようなポスターですが、スウェーデン人から見て不思議だと言われれば、その通りですね。

【2023年10月11日研究講座】

『スウェーデンと日本の外交関係の展望』

ペールエリック・ヘグベリ (Per-Erik Högberg) 駐日スウェーデン大使

2022年10月11日に、明治大学で在日スウェーデン大使ペールエリック・ヘグベリ氏との対談イベントを行いました。在日スウェーデン大使ペールエリック・ヘグベリ氏はこれまでのキャリアで培った豊富な経験を活かして、日本とスウェーデンの関係強化に尽力していらっしゃいます。このイベントでは、学生7名も登壇し、対談形式で大使の活動やスウェーデンと日本の関わりについて深く掘り下げました。

第1部では、大使の仕事内容や、スウェーデンの音楽やビジネス、幸福度など幅広い観点からお話をお伺いしました。仕事内

容に関する質問では、外交官としての役割は、日本との関係強化、領事業務のサポート、また人付き合いやスウェーデンを日本にとってより身近な国にすることなど多岐に渡ります。

次に、スウェーデンが世界的に有名なアーティストや優秀なスタートアップ人材を輩出する背景についての質問をしました。音楽に関しては、他国へ関心を寄せ、さらにそこから優れたものを学ぼうとするグローバル志向や無料の音楽教育、リスクをとるチャレンジ精神がアーティストの育成に貢

献しているとのことでした。スタートアップ人材については、リスクをとる精神と安定を求める日本との文化の違いが挙げられ、スウェーデンのセーフティーネットのある社会システムがチャレンジ精神を育む一因であると指摘されました。最後に、スウェーデンの幸福度の高さについての質問をしたところ、大使は幸福度のランキングには疑問を投げかけつつも、批判的思考力を重視する教育や自己実現の機会が多い社会システムがスウェーデンの幸福度に影響していると説明されました。



第2部では、学生たちがスウェーデンの NATO 加盟に関する質問を投げかけました。まず、良い点について、加盟によって自国の安全が増し、ウクライナへのサポートやヨーロッパの安全への貢献が可能になると述べられました。また、自国やフィンランドの安全のために NATO 加盟は必要不可欠であるとの認識も示されました。

一方で、悪い影響についての質問では、報復の恐れや軍備拡大などの懸念が挙げられましたしかし、大使は報復を恐れて何もしない姿勢が危険であり、自国や周辺国の安

全を守るためには必要な措置であることを強調されました。さらに、NATO 加盟国はウクライナを支援する団結心からまとまりを見せており、経済的な疲労や支援疲れがあると認識しつつも、長期的な影響を考えると妥協は許されないとの立場を示されました。



今回のペールエリック・ヘーグベリ氏との対談イベントでは、大使の豊富な経験に触れながらスウェーデンについて深く学ぶことができました。特に、音楽やビジネス、幸福度に関する議論は興味深く、日本とは異なるスウェーデンの社会システムやそこからもたらされる国民性について理解を深める良い機会となりました。また、NATO 加盟に関する質問では、安全保障上の重要性和国際協力の必要性が伝わりました。一方で、ヨーロッパ全体の支援疲れなど国際政治の現場での課題にも触れられており、国際政治の複雑さを改めて感じました。この議論は、単純な答えがない現実の政治課題について考える良いきっかけとなりました。

[報告者：

明治大学 国際日本学部 石田瑞貴]

【2023年11月13日研究講座】

『ふたりぱぱから見たスウェーデンと日本』 みつつん

今回は、同性カップルの人気 YouTuber ふたりぱぱのみつつん氏をお迎えし、ジェンダーや家族観についてのお話をうかがいました。



みつつん氏は 2016 年にアメリカで代理母出産(サロガシー)によって男の子を授かり、現在はスウェーデンでスウェーデン人のパートナーのリカ氏と暮らしています。「ふたりぱぱ:ゲイカップル、代理母出産(サロガシー)の旅にでる」や「RESPECT 男の子が知っておきたいセックスのすべて」等の本の執筆や個人ブログに加えて、NHK や Abema TV 等の多数のメディアにも出演されています。

本イベントは二部構成で行われ、第一部では代理母出産や性教育、第二部では家族観やジェンダー平等について、みつつん氏に質問しました。

みつつん氏が子どもを授かる方法として、代理母出産をお選びになった理由は「自分たちで育てて生きたいという願望」そして「親権等の法律の考慮」という二つの軸に当てはまった最適の選択肢であったからだそうです。また性教育の意義に関して、「性教育は”全ての人が人生を楽しく豊かに生きるための取り扱い説明書”である。『自分のことを知る』、『相手のことを知る』、そして『相手と自分の心と体を守ること』が必要となり、それが性教育である。取り扱い説

明書と同様で自分の体や心の使い方を学んでいくことで、自分も相手を守れるようになり、最終的には自分が自分らしく生きられる事に繋がる」と話してくださいました。

また育児において大切にされている点をお聞きしたところ、「息子くんが成人するまでに「自信」、「自尊」、「自立」という 3 つの力を培うことが、親としての責任であると仰っていました。続いてジェンダー平等に対して、日本人が取り組むべき事に関しては、「スウェーデンでは、最終的な『結論』よりも相手へのリスペクトをもって個人の意見を聞く等といった『結論に至るまでの過程』に焦点をあてた議論を行うことを大事にする。日本でも民主主義の再教育を通して、誰もが自分の意見を言えるような環境づくりをすることが重要である」と述べられていました。最後にジェンダー教育に関して、「教師が普段の言葉遣いや行動で、ジェンダーへの偏見を作らないことや教育の場でジェンダーの色分けや押し付けない事が子供のジェンダーに関する理解の基盤になっている」とお話しされていました。



今回の講座を通してみつつん氏は、ゲイカップルとして子育てをしているご経験をまっすぐな思いを込めてシェアしてくださいました。みつつん氏の言葉や生き方に後押しされて、自信

をもって自分らしい人生を送れる人が一人でも
増えることを願っています。

[報告者:

早稲田大学 社会科学部 小宮山理奈

東北大学 農学部 時任晴央

早稲田大学 国際教学部 両角円花]

【2023年12月11日研究講座】

**『女性のキャリア形成—スウェーデンと日本の経験から』
クリスティン・エドマン (Christine Edman)**

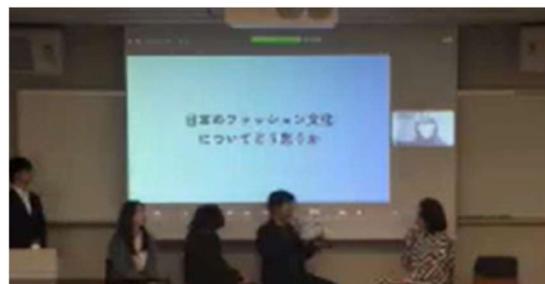
今回は元 H&M ジャパン社長・現 ZOZO 執行役員のクリスティン・エドマン氏をお迎えし、女性のキャリアの築き方やファッション業界の動向についてお話を伺いました。クリスティンさんは日本とアメリカのハーフとして日本で生まれ育ち、日本でキャリアをスタートさせた後にスウェーデン人のパートナーとともにスウェーデンへ移住、MBA を取得されました。出産や子育てを経験しながら H&M の日本進出という大きなミッションを社長として果たされ、GIVENCHY ジャパン CEO を経て、現在 ZOZO 執行役員として働いていらっしゃいます。



第一部では女性のキャリアについてお聞きしましたが、スウェーデンでのカルチャーショックが彼女のキャリア形成に大きな影響を与えたそうです。日本で育った彼女は、働く女性というロールモデルが周りにいなかった中でスウェーデンに移住し、そこで専業主婦や男女の役割分担が存在しないことに衝撃を受けました。H&M に入社した

後も育児とキャリアのどちらかを選択しなくていい、「両立するのは私の権利」という価値観に気づかされます。そのため、後に H&M ジャパン社長としてリーダーを務めるにあたっては社員にとって自身が身近なロールモデルになれるよう、自身の経験を共有してみんながオープンに話せる雰囲気づくりに注力しました。

その後現在に至るまでファッション業界で経験を積み重ねてきた彼女は「戦略的に自分のキャリアを動かしていくことが重要」と自身のキャリア形成の軸を語ります。H&M の日本進出にあたってゼロからの立ち上げやファストファッション業界での戦略を学んだ彼女は、カスタマーサービスやブランディングを学べるラグジュアリーブランド GIVENCHY、そしてコロナ禍も経験したのちオンラインビジネスの ZOZO、という様に自身が次に身に着けたいスキルや経験に沿ってキャリアチェンジをしてきました。



第二部では、これらの経験を踏まえてこれか

らのファッション業界の展望をお聞きしましたが、1つの鍵はオンラインビジネスです。SNSの出現とともにファッションにおける個性の表現の意味が高まっている中で、どれだけオンラインの買い物でも個人に一番似合うものを届けられるかが重要になっています。そのためZOZOでは現在AIを活用して、1人1人の詳細な情報をもとに一番似合う商品を届ける仕組みの模索中なのです。

また、昨今業界として環境や多様性の問題をどう乗り越えるかが大きなトピックとなっています。環境問題に対して大きな鍵となるのがサーキュラーエコノミーです。生産段階からどうリサイクルやアップサイクルを行えるかを考え、材料や生産過程を工夫することで環境への負荷を減らすことが出来ます。また業界全体とし

てダイバーシティを向上させるためには、チームに多様性をもたらすために採用から変える、社内でコミュニティづくりをして当事者が安心できる環境をつくる、LGBTQ 支援団体へ寄付するなど、「企業として確固たるスタンスを取り、内向き外向き双方のアクションを起こすことが重要」と彼女は考えています。

今回の講座を通してクリスティンさんは、子供を育てながら情熱をもって働く1人の女性としての経験をシェアしてくれました。彼女はロールモデルとなることで、自信を持って希望のキャリアを実現できる人が増えていくことを応援しています。

[報告者:

早稲田大学 政治経済学部 新子美穂]

【2023年1月22日研究講座】

明治大学国際日本学部鈴木ゼミ第13期研究発表会

明治大学国際日本学部鈴木ゼミでは、2012年より毎年JISS研究講座の場で卒業発表を実施しており、今年で13回目を迎え、今回は明治大学中野キャンパス(+オンライン)にて開催しました。



本年度の卒業発表グループは10組でしたが、事前発表会における相互の選抜により、以下の5組が発表に臨みました。

高原涼輔・福戸山実李「なぜ昨今スウェーデン民主党が台頭してきたのか」



青木瞳・高松奏音・布施香南「スウェーデンの生産性はなぜ高いのか」



内田優理「スウェーデン人の環境意識が旅行の際に与える影響」



小池桃佳・増井薫乃「北欧から見る日本のフェムテック市場の可能性」



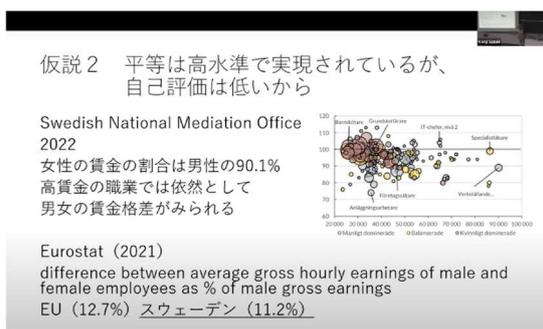
なお、以下の5組の発表についても、研究講座の後に当所のホームページより発表ビデオやスライド資料を期間限定で公開しました。

駒村英美・鹿野葵「移民の人口編成の変化がスウェーデン社会に与える影響」

東花子「スウェーデンの人々が国際連合に好意的な印象を抱いているのは何故か」

熊木裕一・田辺莞菜・田村元幹・中村太星「北欧と日本のデジタル化の進み具合に差が生じている要因は何かー北欧から学ぶ、日本がデジタル化を推進するために必要なこととは」

奥谷優衣「なぜスウェーデンは『他国よりも自国民でいたい』人の割合が低いのか」



木立友里香「日本の政治家はスウェーデンの政治家よりも SNS を使っていないのか」

市川未菜「働く母親の子供と専業主婦の子供の幸福度は異なるのか」